会員の自由な投稿のひろば 一

先輩からの便り

改

否

き

投ずる は

た と

め

生き

ば

なら

ね

なぜ短歌を作るのか

(旧制) 旅順中学の国語教師畑田先生はたいへん 立派な方で、もし将来教師になったならば、こんな 教師になりたいと思ったほどの人だった。惜しむら くは捕虜となってシベリアで亡くなった。涙、涙。

この人の指導で、僕は文語文法が強くなり、動詞 助動詞助詞は的確に使えるようになった。それは良 かったが悪いこともある。時は1930年代、昭和15

年頃だから英語は憎まれていて、授業時 間は減らされ (廃止ではない)、そのため 僕は英語が下手で戦後に苦労する。

さて (旧制) 旅順高校は入試に際して 英語の比重を軽くし、大和魂を尊重して 国語を重視した。だから畑田先生のお陰 で入学できた。昭和17年。

この時代の大和魂とは良い意味の大和 魂ではなくて、米英を憎んで戦争に突き 進むという意味だった。僕が尊敬する先 生はどんどん辞めていった。理由はまっ たく知らされなかった。憎らしい教師だ けが残って、生徒圧迫に力を注いだ。ド イツ語教師の中では、ナチスを礼賛する 教師が残り、礼賛しない人たちは立ち去 った。辞職してどこに行ったのだろう。

食えただろうか。将来こんな世の中になったら大変 ではないか。気になる事である。

ある時河合栄治郎 (注) の著書を読んでいた吉田 君は教師(ナチス礼賛のドイツ語教師)に罵倒され た。その教師は本を床にたたき付けて叫んだ。

「まだこんな本(第二学生物語)を読んでいるの か!」

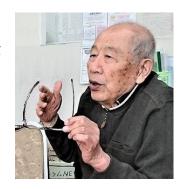
そんな教師たちの中で藤田先生(古典)だけは生 徒と親しみ、質問には気軽に応対してくれた。この 先生の授業は良い意味の大和魂であって軍国主義で はなかった。その藤田先生が僕の短歌を高く評価し

てくれたのである。僕はクラス最高の歌人であった。

(注)河合栄治郎 社会政策学者 東大教 授 自由主義者として 弾圧された。

学徒出陣

学徒出陣というと 「貴方はあの中(あの



雨中の行進)にいたのですか」と問われるのだが、 あれは昭和 18 年秋の神宮外苑の事。僕ははるかに 離れて旅順にいた。年は 18 歳。まだ徴兵の年齢で はない。出陣したのは20歳以上で徴兵を猶予され ていた学生たちが、その猶予を取り消されて徴兵さ れることになった人達である。

僕のクラスでは二浪の O 君がこれに該当した。 盛 大な、且つ悲しい見送り(学校側は何一つしなかっ た。) を受けて彼は旅立った。後日、約一年後、彼は 軍服も凜々しく軍刀も厳めしく、軍靴の音高く我々 を訪問する。彼は後輩(同級生であるが年下の後輩)、 やがて徴兵検査を受けて軍隊に入る友人たちに教訓 の言葉を残した。

『馬鹿になれ』

(馬鹿になったら俺のように偉くなれる。 馬鹿に ならなければ悲劇となるぞ。悲劇のヒーローになる な。だから生き残る道はただ一つ。馬鹿になって生 き残るのだ)

馬鹿になって出世した者も、馬鹿になれずに悲劇 のヒーローになった者も、無垢の赤ちゃんさえも戦 火に焼かれて死んでいった。だからぼくは畑田先 生・藤田先生の教えてくれた短歌の道を歩んで『馬 鹿になってはいけない』と歌いたいのである。

中村さんは 1925 年青島 (チンタオ:中国山東省) 生まれ。6月で93歳。戦後、東京大学を卒業後、渋 川高校、高崎高校、渋川女子高校で世界史を教えた。 今年1月に「上毛歌壇」(『朝日』群馬版)で入選し た歌について文章を寄せていただきました。フォー ラムで長く教育相談を担当した大先輩です。